

付編 町内縄文遺跡出土の「鉄丸石」について

田野町内の縄文時代遺跡からは、器面に渦状の凹凸を持つ礫が出土することがある。『田野町史』には、「水石愛好家によって「鉄丸石」と命名されている」と記されている。

第38・39図は、田野町内で出土した「鉄丸石」である。(1,3,4,7~10,12,13)は、中央の芯を中心として、器面の渦が明瞭に認められる。このうち(1,4,8,10)は、中心部が露出しているが、(4,10)は空洞化している。形状は、(1,3,7,8)は饅頭形であるが、(9,12,13)は不正形な棒状を呈する。また、(7,9)は器面が脆く、僅かな衝撃でも表面が剥がれ落ちる。この2点は色調が黒く、比重も大きい。

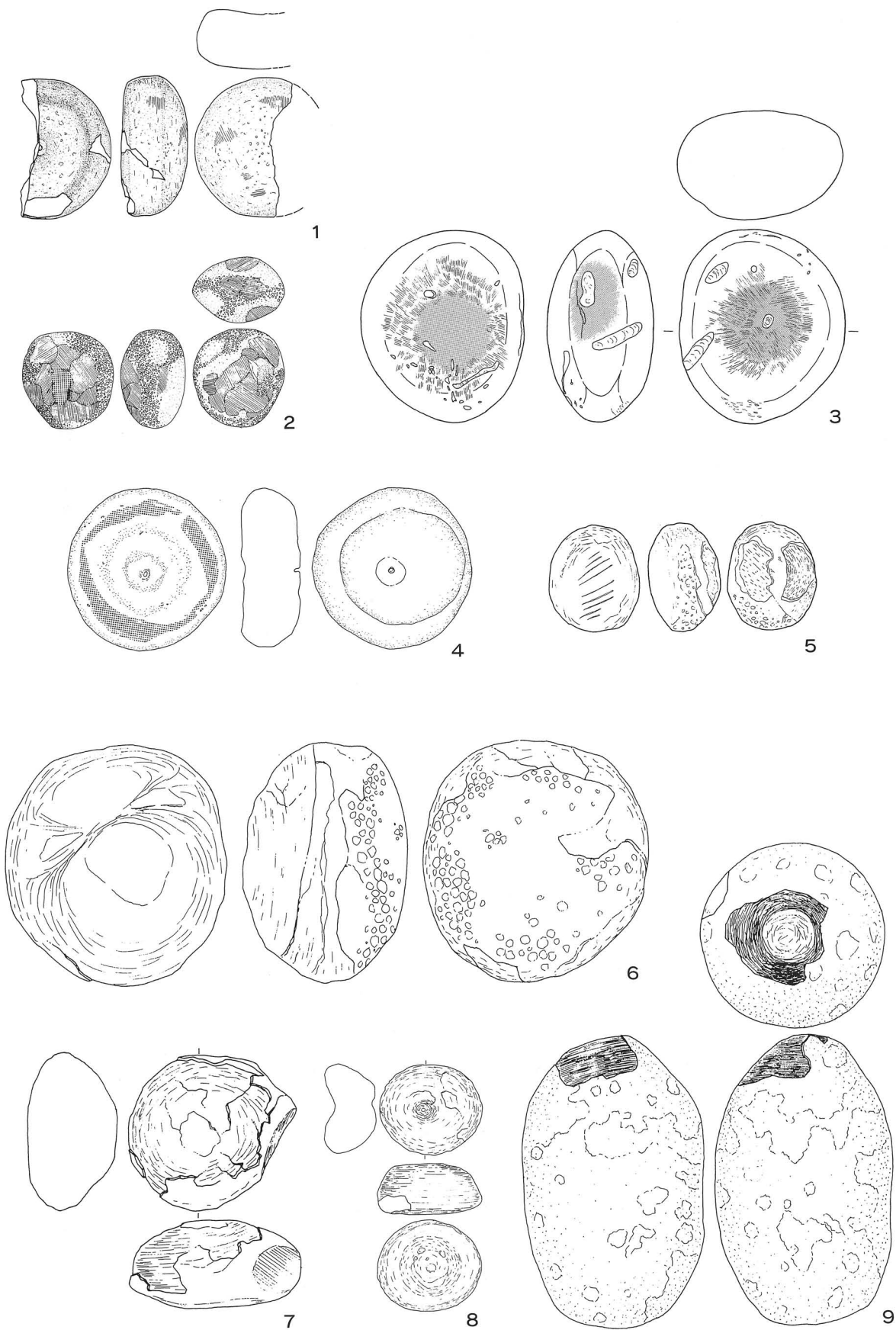
この石材について、宮崎県総合博物館学芸課の松田清孝氏に鑑定を依頼したところ、「ノジュール」という回答があった。堆積岩中に含まれた、生物遺存体などの異物の周りに鉱物が集積し、成長したもののことである。器面に見られる芯はその異物であり、芯の部分が空洞化する現象は、風化により異物部が消失したものであろう。比重が高く、黒色となるものは、主にマンガンが集積したためと考えられる。四万十層群、宮崎層群の両方から確認例があり、採集可能な地点は田野盆地に限らないとのことであった。

田野町内では、これまで野崎地区鹿毛第3遺跡、鹿村野地区ズクノ山第2遺跡E地区、八重地区永迫第2遺跡、宮田遺跡、七野地区井手ノ尾遺跡、元野地区高野原遺跡、元野河内遺跡、畑田遺跡、本野原遺跡と、早期から後期に至るまで、町内のほぼ全域の遺跡から確認されている。自然堆積で包含層中に混入するとは考えにくく、加工が行われなかったとしても、人為的に遺跡内に持ち込まれた「遺物」と考えるべきであろう。

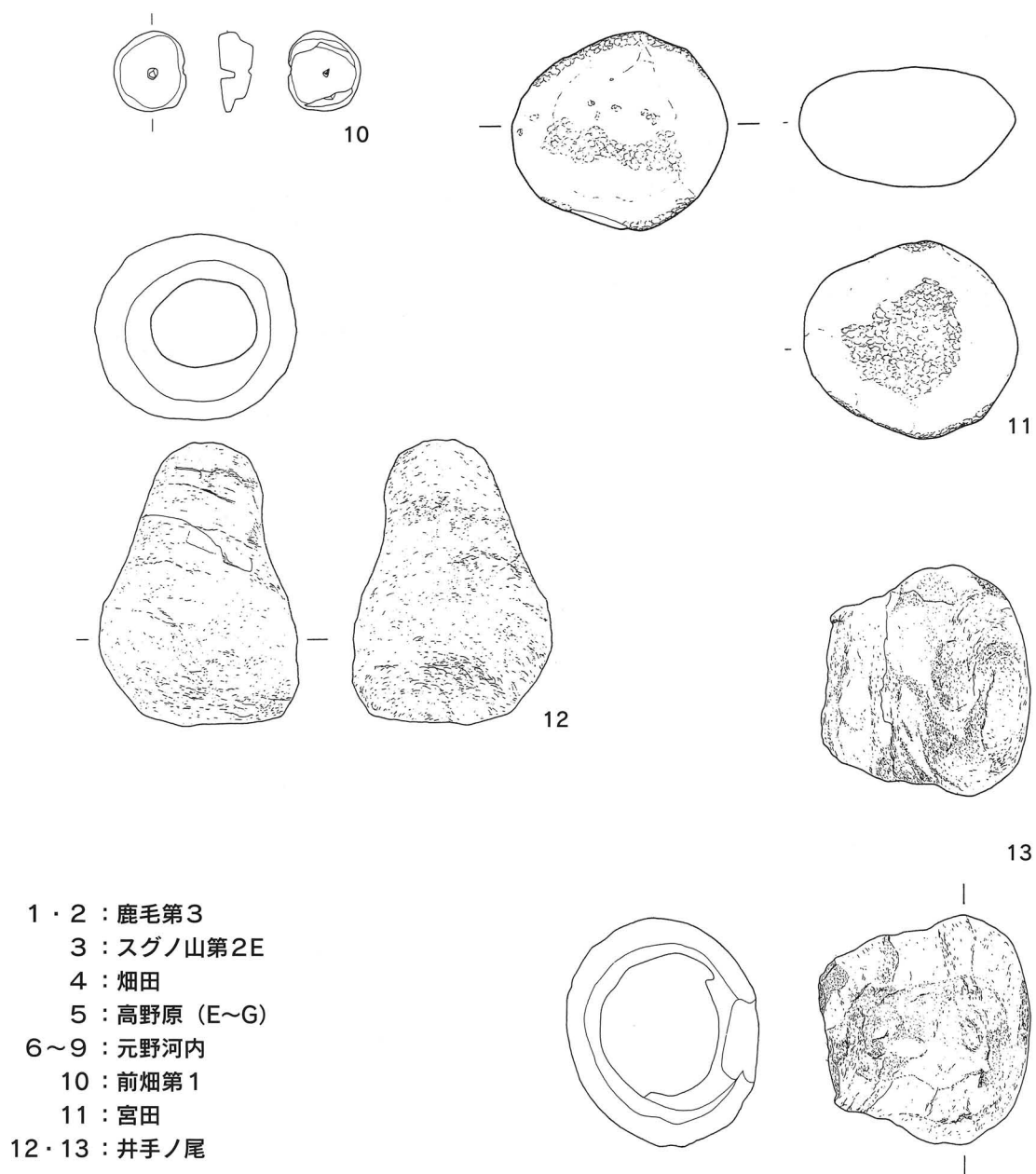
加工は、(1)には部分的に擦痕、(2)は全面にわたって擦痕と敲打痕、(3)は両面に擦痕及び研磨痕、(4)は片面に研磨痕、(5)は一端に敲打痕、(11)は片面及び周縁に敲打痕である。なお、(10)は、垂飾のような概観を呈するものの、成形された痕跡は見られない。このように、擦痕、敲打痕、研磨痕が行われるが、(5)以外は、通常の磨石に見られるような痕跡—平坦面への研磨痕・一端及び周縁部への敲打痕—とはやや趣が異なるようである。そもそも、この石材の多くは比重が高く、磨石・敲石等には適さないことから、ペット・ストーン等、「第2の道具」として使用された可能性が推測される。

(参考文献)

- 田野町史編纂委員会 1983『田野町史 下巻』田野町
田野町教育委員会 1998「鹿毛第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第28集
田野町教育委員会 1996「永迫第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第21集
田野町教育委員会 1994「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集
田野町教育委員会 1998「井手ノ尾遺跡」『田野町文化財調査報告書』第14集
田野町教育委員会 2000「高野原遺跡(E~G区)」『田野町文化財調査報告書』第36集
田野町教育委員会 2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集
田野町教育委員会 2001「畑田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集
田野町教育委員会 2003「鹿村野地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第47集



第38図 町内出土の「鉄丸石」(1)



第39図 町内出土の「鉄丸石」(2)